

On the Personality of *Sima Yi* from 235 to the Jinshu 景初 Period based upon a Critical Analysis of “*Jin Shu*” *Xuandiji*, “*Sanguozhi*” and Pei Songzhi’s “*Sanguozhi Zhu*”

Takashi Mitsuda

Based on a comparative analysis of “*Jin Shu*” *Xuandiji* 〔晉書〕 宣帝紀, parts of this compilation seem to be based on “*Sanguozhi*” 〔三國志〕, Zang Rongxu “*Jin Shu*” 臧榮緒 〔晉書〕, Gan Bao “*Jin Ji*” 干寶 〔晉紀〕, and “*Han Jin Chunqiu*” 〔漢晉春秋〕 or other works of history using the same sources. However, other parts of the “*Jin Shu*” *Xuandiji* seemed to have the opposite or different contents from the “*Sanguozhi*” and Pei Songzhi’s “*Sanguozhi Zhu*” 裴松之 〔三國志〕 注 as the way they depict *Sima Yi* 司馬懿, regarded as the first emperor of the Jin dynasty, is different, i.e., the former includes anecdotes and expressions that appear to enhance his authority.

Sima Yi and his family was extremely careful in their relationship with *Ming Di* 明帝 of the *Cao Wei* 曹魏 placing importance on political survival, rather than expansion of his family’s influence, and deepened relationships with the imperial family and the famous clans.

After *Guanqiu Jian* 毋丘儉 and *Ming Di* failed in their expedition to *Liaodong* 遼東, *Sima Yi*’s success there saved them, and this victory helped improve *Sima Yi*’s political status.

曹魏の青龍3年～景初年間の司馬懿像に 関する史料批判的研究

—『晉書』卷一宣帝紀と『三國志』及び裴松之注を中心として

満 田 剛

はじめに

曹魏の青龍3年・蜀漢の建興13年（西暦235年）、司馬懿は大將軍から太尉に遷ったものの、長安にあって蜀漢に備えていたが、諸葛亮の五丈原での陣没などを受け、遼東方面が一気に風雲急を告げることとなった。

これまでの先行研究では明帝期の軍事行動と政治史の流れが別々に述べられることが多く、司馬懿に関する様々な政治的事象のその時点での意義に関する考察を尽くし切れていないようにも思われる。また、陳壽『三國志』〔以下、『三國志』からの引用については書名・巻数を省略する〕及び裴松之『三國志』注〔以下、「裴注」と略す〕と『晉書』卷一宣帝紀（以下、『晉書』の巻数は略す）では記述の相違が多いことに注意が必要である。

そこで本論文では、曹魏を中心とする政治史を踏まえ、呉士鑑・劉乘幹〔注〕『晉書輯注』（藝文印書館、1936年）、渡邊義浩・高橋康浩〔編〕『晉書校補』（大東文化大学東洋研究所、2013年）などを参照しながら、司馬懿の政治的動向を年代記として網羅的に整理し直し、青龍3年（西暦235年）から景初2年（238年）頃までの司馬懿に関して、主として『晉書』宣帝紀（以下、宣帝紀と略す）と陳壽『三國志』及び裴注所引史籍などとの記述を比較し、史料批判的研究を行ってそれらの史書の傾向を分析しつつ、場合によっては司馬懿に係る宣帝紀に存在しない事象なども取り上げて、各史書における司馬懿像に関する考察・分析も進めたいと考えている。

1：白鹿献上と所謂「曹真殘碑」や洛陽の「宮室修治」、そして遼東遠征の準備

(青龍3年(235年)～5年・景初元年(237年)頃)

まず宣帝紀における青龍4年～5年(景初元年)頃の司馬懿の動向について確認しておきたい。

四年，獲白鹿，獻之。天子曰：「昔周公旦輔成王，有素雉之貢。今君受陝西之任，有白鹿之獻，豈非忠誠協符，千載同契，俾乂邦家，以永厥休邪。」及遼東太守公孫文懿¹⁾反，徵帝詣京師。天子曰：「此不足以勞君，事欲必克，故以相煩耳。君度其作何計。」對曰：「棄城預走，上計也。據遼水以距大軍，次計也。坐守襄平，此成擒耳。」天子曰：「其計將安出。」對曰：「惟明者能深度彼己，豫有所棄，此非其所及也。今懸軍遠征，將謂不能持久，必先距遼水而後守，此中・下計也。」天子曰：「往還幾時。」對曰：「往百日，還百日，攻百日，以六十日爲休息。一年足矣。」

是時大修宮室，加之以軍旅，百姓饑弊。帝將即戎，乃諫曰：「昔周公營洛邑，蕭何造未央，今宮室未備，臣之責也。然自河以北，百姓困窮，外内有役，勢不並興，宜假絕內務，以救時急。」

ここではまず最初に、西方を示す「白」の配色を持ち、西王母が乗って黄帝や虞舜を訪れたとされる「白鹿」を司馬懿が献上し、明帝から「忠誠協符」と賞されていることが述べられている。津田資久はさらに青龍3年に司馬懿が太尉・都督雍涼二州諸軍事として管轄する張掖郡から符瑞である「張掖郡玄石図」が報告されていることに加えて、青龍3年から景初元年(237年)10月末以前に建立されたとされる所謂「曹真殘碑」に高堂隆が主張した「虞舜始祖曹氏系譜」が見えることから、司馬懿が高堂隆とともに明帝・曹叡を擁護する動きを見せており²⁾、司馬懿が陳矯傳裴注所引『世語』にある「社稷之臣」であるかどうかを陳矯が「未だ知らず」と述べて判断していない理由として司馬懿が帝室と私的なつながりが強い「身内」と認識していたためだとし³⁾、高堂隆傳にある彼の上疏の中の

臣觀黃初之際，天兆其戒，異類之鳥，育長燕巢，口爪胸赤，此魏室之大異

也，宜防鷹揚之臣於蕭牆之內。可選諸王，使君國典兵，往往棋峙，鎮撫皇畿，翼亮帝室。

という一文における「鷹揚之臣」を司馬懿ではなく劉放だとする⁴⁾。

それに対して、渡邊義浩は司馬昭の義父である王肅の反対があっても司馬懿が明帝・高堂隆による高堂隆の鄭玄説に基づく改制に賛成したにも関わらず、改制が237年までずれ込んだ理由について、「白鹿」などに象徴される白徳に積極的な司馬懿への恐怖があったとし、司馬懿にとっては改制に賛成しながらも白の瑞祥を掲げ続けて国家の交替を予感させることができるので、明帝・高堂隆にとっては喜ばしいことではなかったとし⁵⁾、「鷹揚之臣」は司馬懿であったと考えている⁶⁾。

ただ、渡邊も指摘しているように、もともと曹魏では文帝の頃から白の瑞祥が多く、明帝・高堂隆の改制でも白を尊んでいた⁷⁾ことも踏まえると、国家の交替を予感させる記述をしたのは現行『晉書』やその典拠となった史書の著者たちであって、司馬懿の意図とは限らないのではないかと考える。むしろこの時期の司馬懿が司馬師の婚姻関係への配慮⁸⁾や「曹真殘碑」への関わり方⁹⁾、そして「白鹿」の献上を経た上で、明帝・高堂隆の改制に賛成していたことは、津田が述べるように高堂隆とともに明帝を支えていたことを示していると思われるが、その行動の狙いとしては明帝（・高堂隆）からの警戒¹⁰⁾に対する自身と一族の保身のための「配慮」だったと筆者は考えている。

さらに、高堂隆と司馬懿は、ほぼ同時期に、明帝の洛陽の「宮室修治」¹¹⁾に対し反対意見を述べていたことも重要であるが、「狂直」とまで言われるほどの諫言を見せた高堂隆に対して、司馬懿は必要最小限の内容を簡潔に述べているように見える。このような諫言に関する司馬懿の消極的な一面について、朱子彦は明帝の「性格」と既に他の臣下が数多く諫言していることに加え、三公の一つである太尉である自身の発言の重さも踏まえ、簡潔な意見表明にとどめ、明帝から警戒されている自身の保身を図ったとする¹²⁾が、傾聴に値する見解であろう。

その後、高堂隆と明帝が相次いで没した後の景初3年（239年）12月には改制

は旧に復され¹³⁾、正始年間以降、郊祀は行われなくなるが、渡邊も王肅が司馬懿との結びつきを模索するのは明帝崩御後のことであるとしており¹⁴⁾、これもこの頃の司馬懿の行動が明帝の警戒に対する保身のための配慮であった傍証となるのではないかと考えている。

この間に遼東公孫氏政權¹⁵⁾が反したとされるが、この時が最初ではない。詳細は先行研究に審らかに記されているので公孫淵が君主となった後について簡潔に述べると、諸葛亮の北伐が始まった太和2(228)年に叔父・公孫恭から位を奪った公孫淵に対し、太和3(229)年には孫権から使者が派遣されていたが公孫淵は拒絶し、太和4(230)年に魏は車騎將軍に任じて懷柔していた¹⁶⁾が、太和6(232)年3月に呉が派遣した周賀と裴潜が遼東に到着し¹⁷⁾、9月には魏の田予が周賀を斬っている¹⁸⁾。また、この太和6年には魏の幽州刺史・王雄と平州刺史・田予が遼東を攻撃している¹⁹⁾。同年10月には裴潜に随って遼東からの使者が呉に至り、呉に従う意志を示すと、孫権は公孫淵に爵位を与え²⁰⁾、さらに青龍元(233)年3月には公孫淵の使者に帰国に併せて孫権も使者を派遣し燕王の位を与えようとした²¹⁾。すると、張昭は反対して諫めた²²⁾が、結局公孫淵は魏の懷柔を受けて大司馬・楽浪公となり、呉からの使者を殺している²³⁾。その後、呉は公孫氏だけでなく高句麗も抱き込もうとし良馬を獲得した²⁴⁾が、最終的には失敗し、青龍4(236)年には高句麗王・位宮が呉の使者の胡衛らの首を魏の幽州に届けてきている²⁵⁾。

このような動きを受けて、魏では母丘儉(母丘儉)を派遣して烏丸・鮮卑も統率させようとし、実際に右北平烏丸単于・寇婁敦と遼西烏丸都督率衆王・護留葉が降ってきていて、さらに公孫淵をも召し寄せようとしていた²⁶⁾。加えて、高句麗が呉の使者の首を魏に送ってきたのがこの前年(青龍4(236)年)であり、衛臻傳に

幽州刺史母丘儉上疏曰：「陛下即位已來，未有可書。呉、蜀恃險，未可卒平，聊可以此方無用之士克定遼東。」臻曰：「儉所陳皆戰國細術，非王者之事也。呉頻歲稱兵，寇亂邊境，而猶案甲養士，未果尋致討者，誠以百姓疲勞故也。且淵生長海表，相承三世，外撫戎夷，内脩戰射，而儉欲以偏軍長

驅，朝至夕卷，知其妄矣。」儉行軍，遂不利。

とあるように、母丘儉が明帝との親しい関係をもとに、上疏で「まだ記録すべき「業績」のない明帝のため」という名目で、「孫呉や蜀漢征伐が早急には平定できないので、遼東平定を目指す」と述べてから出撃していることも踏まえると、孫権と高句麗が通じたという話は母丘儉派遣のための口実だった可能性がある²⁷⁾。そして、公孫淵は母丘儉と戦い、母丘儉は遼水の出水のためにやむなく撤退する。その後、公孫淵は自立して燕王と称し、紹漢という年号をたてて建国しているが、宣帝紀における公孫淵の「反」はこの時のことを指すと認識していた可能性がある。なお、盧弼は司馬懿と明帝の遼東遠征に関する協議の記事を宣帝紀が青龍4年に叙述するのは誤りで、公孫淵傳は景初2年と作るとし、『資治通鑑』卷七十四 魏紀六 烈祖明皇帝下 景初2年の正月に司馬懿を長安から召して遼東を討伐させたとする記事と司馬懿が長安にいたことへの胡三省の注を引用している（盧弼〔集解〕錢劍夫〔整理〕『三國志集解』（上海古籍出版社、2009年）卷三明帝紀、433頁）が、宣帝紀においてここに遼東遠征に関する協議の記事を挿入したのはこの認識に依拠しており、景初元年後半にこの協議を行って、翌年1月に出陣したとするためだと考えられる。ここまで述べた点について、筆者は景初2（238）年の可能性が高いと考えているが、景初元（237）年後半の司馬懿の行動が判然としないことから、現時点では判断を留保しておくこととする。

そもそも母丘儉は、父・母丘興が建安19（214）年頃に安定太守に²⁸⁾、黄初年間に武威太守となって河右を開通し、賊の張進や胡の叛乱を討ったことで功績を挙げ²⁹⁾、将作大匠となった爵位を受け継いで平原侯文学となったところから官歴が始まっており、明帝が即位すると、東宮時代以来の関係から厚遇を受け、尚書郎、羽林監、洛陽典農を歴任しているが、青龍3（235）年から本格化する「宮室修治」の際は母丘儉も明帝に諫言しており、荊州刺史に昇進したとされる³⁰⁾。これは明帝即位直後の司馬懿などと同様に政権中枢から遠ざけられたと見ることも可能であるものの、母丘儉傳にも青龍年間に幽州刺史に遷ったとされることから、その時期は青龍3（235）年から少なくとも景初元（237）年

7月以前であると思われることから、「宮室修治」への諫言を経てもなお明帝からの信頼は揺らいでいないということになるだろう。

そのような中で、衛臻傳にあるように、明帝の「業績」作りのための出撃と理解できることに加え、衛臻が「三代の基盤を持つ公孫淵を「此方無用之士（遼東方面の用いられていなかった兵士）」の「偏軍」で抑え込む「妄」を指摘し、実際にその通りになっていることからすれば、母丘儉の出撃はかなり問題があったということになるだろう³¹⁾。

ここまで述べたことを踏まえると、すでに大將軍から太尉に遷して名誉職への移行が始まっている上に、そのまま蜀漢への抑えとして留め置かれるなど、明帝が警戒し、冷遇にも見える扱いをしている人物である司馬懿が母丘儉の失敗を受けて派遣されていることになる。「浮華」の問題で若手の人材が排除されていたことによる人材不足の影響³²⁾も考慮すると、この司馬懿の派遣には明帝の同世代で比較的若く、経験不足の母丘儉、ひいては明帝の「尻ぬぐい」という側面も見えてくる。

さらに、司馬懿の遼東遠征の後で母丘儉に食邑3900戸が与えられている³³⁾ことに関連して、陳陽が（史書に明記されている中で）明帝期では満寵に次ぐ食邑の数であることを指摘している³⁴⁾に加えて、明帝紀裴注所引母丘儉『志記』に

時以儉爲宣王副也。

とあることも踏まえると、母丘儉を副として司馬懿につけていることは司馬懿の補佐役や監視役であると同時に、母丘儉を「育成」し、功績を積み重ねさせようとしていることが考えられる³⁵⁾。

ここまでの母丘儉の経歴の特徴を遼東遠征の頃までの司馬懿との関係から考えると、以下の点が挙げられる。第一に、父の母丘興が安定・武威の太守を歴任して一定の功績を挙げていたことも雍州・涼州を管轄して現地の豪族たちとの関係を築いていた司馬懿としては無視できなかったと思われる。第二に、母丘儉が明帝と非常に親しかったことは宗室と近づこうとしていた司馬懿の一族内方針との親和性があったと考えられる。そして第三に、「宮室修治」につい

ても司馬懿と同じ反対の立場からの発言をしていたことが挙げられる。さらに、司馬懿の遼東遠征そのものが母丘儉と明帝の「失敗」をリカバリーするためであったと見られる。これらを踏まえると、司馬懿と母丘儉の関係は対立するようなものではなく、明帝に逆らわない司馬懿が母丘儉を引き上げようとしたと考えられることから、むしろ良好な関係だったのではないかと推測できる。

後年のことであるが、司馬懿の没後、母丘儉は司馬懿の後を継いで政権首班となっていた司馬師と戦うことになるが、その際の上奏文では司馬懿を誇ることなく褒め称えており、司馬師一人に対して子として不孝だとして攻撃している³⁶⁾。司馬師との決戦に向かうにあたっては中途半端な印象を受けるが、先述のような司馬懿が管轄する雍州・涼州での母丘興の功績に加えて明帝との親密な関係や「宮室修治」での立場が共通していること、そして司馬懿の公孫淵征伐によって結果的に経歴を救われ、母丘儉の最大の功績である高句麗討伐³⁷⁾の基盤が築かれたことも踏まえた良好な関係があったと想定すれば、十二分にあり得る内容であろう。

この遼東遠征に関する明帝と司馬懿の会話については、明帝紀裴注所引干寶『晉紀』に

帝問宣王：「度公孫淵將何計以待君？」宣王對曰：「淵棄城預走，上計也；據遼水拒大軍，其次也；坐守襄平，此爲成禽耳。」帝曰：「然則三者何出？」對曰：「唯明智審量彼我，乃預有所割棄，此既非淵所及，又謂今往縣遠，不能持久，必先拒遼水，後守也。」帝曰：「住還幾日？」對曰：「往百日，攻百日；還百日，以六十日爲休息，如此，一年足矣。」

とある（波線部は「宣帝紀」と同字、二重線部は同内容のものを示す。以下同様。）が、内容の重なりが多く、現行宣帝紀が干寶『晉紀』と同じ史書、もしくは干寶『晉紀』そのものを典拠としていると考えられる。この記述については、この内容とほぼ同じ期間で終わっていることも踏まえると、結果から逆算した後付けの記述の可能性があるが、他の史料もなく、史料批判が難しいため、ひとまず受け入れておくこととする。

2：遼東遠征前の故郷での飲飲（景初2（238）年）

次いで宣帝紀における景初2年の司馬懿の動向³⁸⁾について確認しておきたい。

景初二年，帥牛金、胡遵等步騎四萬，發自京都。車駕送出西明門，詔弟孚、子師送過溫，賜以穀帛牛酒，敕郡守典農以下皆往會焉。見父老故舊，讌飲累日。帝歎息，悵然有感，爲歌曰：「天地開闢，日月重光。遭遇際會，畢力遐方。將掃羣穢，還過故鄉。肅清萬里，總齊八荒。告成歸老，待罪舞陽。」

この一文に関連して、明帝紀には

景初……二年春正月，詔太尉司馬宣王帥衆討遼東。……初，帝議遣宣王討淵，發卒四萬人。議臣皆以爲四萬兵多，役費難供。帝曰：「四千里征伐，雖云用奇，亦當任力，不當稍計役費。」遂以四萬人行。

とあり、1月に出撃したことに加えて、『三國志』でも司馬懿が都から出撃した際の兵数が4万であったことがわかる。

また、『初學記』卷六所引臧榮緒『晉書』卷一には

景初二年，發自京東都過魏溫。詔郡守已下。皆會幕次。父老故舊。燕飲累日。

とあり、宣帝紀と類似していることから、現行宣帝紀が臧榮緒『晉書』と同じ史書、もしくは臧榮緒『晉書』そのものを典拠としていると考えられる。

また、ここに登場する司馬懿の詩については、天子の名に従い力を振り絞って群穢を掃して故郷に戻ってきたとし、さらに万里を肅清して国家の隅々までまとめ上げて皇帝に報告した後は封地の舞陽にてご聖断を待つとの意であるが、この詩には明帝の配慮を受けての故郷での宴会という明帝の目が光っている可能性の高い場において、明帝に逆らわず、意に沿うように配慮した可能性を念頭に置いておくことが重要ではないかと考えている³⁹⁾。

この記述によれば、明帝が西明門まで見送り、さらに特別の配慮で司馬孚・司馬師が河内郡温県まで見送りにきた上で、故郷で父老や故旧を集めて宴会を行い、司馬懿が詩を詠んだとされる。この記述については、他の史料がないこ

ともあり、このままひとまず受け入れておくこととする。

3：遼東遠征（景初2（238）年）

この後、宣帝紀でも遼東遠征に関する記述となるが、司馬懿の遼東遠征については先行研究でも細かく叙述されているので、本論攷では宣帝紀の記述に関する内容を中心に見ていくこととする。

さて、宣帝紀には

遂進師，經孤竹，越碣石，次于遼水。文懿果遣步騎數萬，阻遼隧，堅壁而守，南北六七十里，以距帝。帝盛兵多張旗幟出其南，賊盡銳赴之。乃泛舟潛濟以出其北，與賊營相逼，沈舟焚梁，傍遼水作長圍，棄賊而向襄平。諸將言曰：「不攻賊而作圍，非所以示衆也。」帝曰：「賊堅營高壘，欲以老吾兵也。攻之，正入其計，此王邑所以恥過昆陽也。古人曰，敵雖高壘，不得不與我戰者，攻其所必救也。賊大衆在此，則巢窟虛矣。我直指襄平，則人懷內懼，懼而求戰，破之必矣。」遂整陣而過。賊見兵出其後，果邀之。帝謂諸將曰：「所以不攻其營，正欲致此，不可失也。」乃縱兵逆擊，大破之，三戰皆捷。賊保襄平，進軍圍之。

とあり、明帝紀には

景初……二年……八月……丙寅，司馬宣王圍公孫淵於襄平，大破之，傳淵首于京都，海東諸郡平。

とあり、公孫淵傳には

二年春，遣太尉司馬宣王征淵。六月，軍至遼東。淵遣將軍卑衍、楊祚等步騎數萬屯遼隧，圍塹二十餘里。宣王軍至，令衍逆戰。宣王遣將軍胡遵等擊破之。宣王令軍穿圍，引兵東南向，而急東北，即趨襄平。衍等恐襄平無守，夜走。諸軍進至首山，淵復遣衍等迎軍殊死戰。復擊，大破之，遂進軍造城下，為圍塹。

とあるが、宣帝紀と公孫淵傳を比較すると、共通する字は少ないが、内容としては共通する箇所が多く、宣帝紀では司馬懿や諸將の発言があり、より詳細に描かれている。

ただ、公孫淵傳に6月に遼東に到ったとあり、先に引用した宣帝紀や明帝紀裴注所引干寶『晉紀』の「往百日，……以六十日爲休息」からすると、司馬懿の発言よりは到着までに時間がかかったということになるが、李智裕は司馬懿が母丘儉の失敗を受けて、雨季を避けようとしたためではないかと述べており、非常に興味深い⁴⁰⁾。また、公孫淵が遼隧⁴¹⁾に掘らせた塹壕の距離が宣帝紀では六七十里、公孫淵傳では二十余里と異なっているが、これには宣帝紀（や干寶『晉紀』）では司馬懿の功績を強調しようとする意図があるものと思われる。

宣帝紀によれば、公孫淵側が遼隧に塹壕を掘って守りを固めていたところ、司馬懿は旗幟を多く張らせて南に出ようと見せ、公孫淵の軍がそちらに赴いたところ、実際には船で遼水を渡って北に出て襄平に向かい、追いついてきた賊軍も撃破して襄平を囲んだとされる。宣帝紀と公孫淵傳を比較すると、遼隧に塹壕を掘って守りを固めていたことや司馬懿が兵を襄平に向かわせたこと、その動きに気づいた公孫淵軍が急いで襄平に向かい、激戦になって曹魏軍が勝利したことは共通しているが、公孫淵傳では司馬懿がいったん兵を東南に動かしてから東北に向かったとされることや船を使用した記述がないこと、襄平に向かった曹魏軍が首山に至ってから公孫淵軍と激戦となったことが異なっている。また、宣帝紀では司馬懿の正統性と業績を強調するためか、現場でも用いられていたであろう「賊」の字を用いているのに対して、公孫淵傳は「賊」の字を用いず、宣帝紀に比すれば客観的に見える表現を用いている。

なお、先に引用した明帝紀に景初元年の母丘儉の敗北後に海船を建造したとあり、韓傳にも

景初中，明帝密遣帶方太守劉昕、樂浪太守鮮于嗣越海定二郡，諸韓國臣智加賜邑君印綬，其次與邑長。

とあって景初年間に劉昕や鮮于嗣に帶方・樂浪を遣わして平定しているが、景初元年に船が建造されはじめ、景初3年正月には明帝が崩御していることから、この遠征は司馬懿の遼東遠征とほぼ同時期と思われる⁴²⁾。李智裕は公孫淵が陸の道を重視して海を軽視していたことから、司馬懿が襄平に向かう前に南に向かう姿勢を見せることで海を通ってくるであろう劉昕や鮮于嗣の艦隊と連

携して攻撃する姿勢を示して、公孫淵軍を動揺させるとともに雨季に遼河一帯で公孫淵軍と対峙する時間を減らし、その後渡河して襄平を急襲することで公孫淵軍が魏軍の後を追わざるを得ない状況を作ろうとしたと考えている⁴³⁾。この見解も大変興味深いが、仁藤敦史は東夷傳序に

景初中，大興師旅，誅淵，又潛軍浮海，收樂浪、帶方之郡，而後海表謐然，東夷屈服。

とあることから、陸上からの司馬懿の遼東攻撃と海上からの帶方・樂浪攻撃は「基本的に区別される独自の軍事行動」⁴⁴⁾と述べており、司馬懿と劉昕や鮮于嗣がどこまで連携していたかは判然としないが、少なくともこの（公孫康が設置した）帶方郡や樂浪郡への海上遠征が司馬懿の遼東遠征を補完する役割を果たしていたことを想定する必要があるだろう。

その後、宣帝紀では

初，文懿聞魏師之出也，請救於孫權。權亦出兵遙爲之聲援，遣文懿書曰：「司馬公善用兵，變化若神，所向無前，深爲弟憂之。」

とあり、公孫淵が孫呉に救援を求め、孫権は応じて出兵するが、同時に手紙で「司馬公は善く兵を用い、変化は神のようであるから、弟のために憂いている」と述べている。公孫淵傳裴注所引『漢晉春秋』には

公孫淵自立，稱紹漢元年。聞魏人將討，復稱臣於吳，乞兵北伐以自救。吳人欲戮其使，羊銜曰：「不可，是肆匹夫之怒而捐霸王之計也。不如因而厚之，遣奇兵潛往以要其成。若魏伐淵不克，而我軍遠赴，是恩結遐夷，義蓋萬里，若兵連不解，首尾離隔，則我虜其傍郡，驅略而歸，亦足以致天之罰，報雪曩事矣。」權曰：「善」。乃勒兵大出。謂淵使曰：「請俟後間，當從簡書，必與弟同休戚，共存亡，雖隕于中原，吾所甘心也。」又曰：「司馬懿所向無前，深爲弟憂也。」

とあり、内容としてはこちらの方が詳細であるが、孫権からの「発言」の字句には共通点が多く、現行宣帝紀が『漢晉春秋』と同じ史書、もしくは『漢晉春秋』そのものを典拠としていると考えられる。

宣帝紀には

會霖潦，大水平地數尺，三軍恐，欲移營。帝令軍中敢有言徙者斬。都督令史張靜犯令，斬之，軍中乃定。賊恃水，樵牧自若。諸將欲取之，皆不聽。司馬陳珪曰：「昔攻上庸，八部並進，晝夜不息，故能一句之半，拔堅城，斬孟達。今者遠來而更安緩，愚竊惑焉。」帝曰：「孟達衆少而食支一年，吾將士四倍于達而糧不淹月，以一月圖一年，安可不速？以四擊一，正令半解，猶當爲之。是以不計死傷，與糧競也。今賊衆我寡，賊飢我飽，水雨乃爾，功力不設，雖當促之，亦何所爲。自發京師，不憂賊攻，但恐賊走。今賊糧垂盡，而圍落未合，掠其牛馬，抄其樵采，此故驅之走也。夫兵者詭道，善因事變。賊憑衆恃雨，故雖飢困，未肯束手，當示無能以安之。取小利以驚之。非計也。」朝廷聞師遇雨，咸請召還。天子曰：「司馬公臨危制變，計日擒之矣。」既而雨止，遂合圍。起土山地道，楯櫓鉤橦，發矢石雨下，晝夜攻之。

とある。それによると、雨が續いて遼水が溢れ、平地で水位が数尺にも達したため、軍營を移動させようとの意見もあったが、司馬懿は移動を口にした者を斬ると命令し、実際に命令違反を犯した都督令史の張靜を斬って軍を落ち着かせたことと、襄平城内の公孫淵側を刺激せず、城内の兵糧が尽きると雨があがるのを待ち、雨があがると司馬懿は包囲を完成させ土山をつくり地道（地下道）を掘って攻城兵器を押し出して昼夜を通して矢や石を雨のように降らせたことが記されている⁴⁵⁾が、この箇所について、明帝紀には

及宣王至遼東，霖雨不得時攻，羣臣或以爲淵未可卒破，宜詔宣王還。帝曰：「司馬懿臨危制變，擒淵可計日待也。」卒皆如所策。

とあり、公孫淵傳には

會霖雨三十餘日，遼水暴長，運船自遼口徑至城下。雨霽，起土山、脩櫓，爲發石連弩射城中。淵窘急。糧盡，人相食，死者甚多。將軍楊祚等降。

とあり、共通する部分も多いが、宣帝紀の方がより詳しく、現行宣帝紀が明帝紀・公孫淵傳と同じ史書や史料を典拠としていると考えられる。

宣帝紀では、

時^レ有^ニ長星^一、色白、有^ニ芒鬣^一、自襄平城西南流于東北、墜於梁水、城中震懼。文懿大懼、乃使其所署相國王建、御史大夫柳甫乞降、請解圍面縛。不許、執建等、皆斬之。檄告文懿曰：「昔楚鄭列國、而鄭伯猶肉袒牽（率）羊而迎之。孤爲王人、位則上公、而建等欲孤解圍退舍、豈楚鄭之謂邪！二人老耄、必傳言失旨、已相爲斬之。若意有未已、可更遣年少有明決者來。」文懿復遣侍中衛演乞剋日送任。帝謂演曰：「軍事大要有五、能戰當戰、不能戰當守、不能守當走、餘二事惟有降與死耳。汝不肯面縛、此爲決就死也、不須送任。」文懿攻南圍突出、帝縱兵擊敗之、斬于梁水之上星墜之所。既入城、立兩標以別新舊焉。男子年十五已上七千餘人皆殺之、以爲京觀。僞公卿已下皆伏誅、戮其將軍畢盛等二千餘人。收戶四萬、口三十餘萬。

とあり、公孫淵の降伏の申し込みを拒絶し、襄平を攻め落として京観を築き、公孫淵側の公卿・将軍を誅殺して4万戸、30余万の人口を収めたとある。

先に引用した明帝紀景初二年八月丙寅条に加えて、公孫淵傳には

八月丙寅夜、太流星長數十丈、從首山東北墜襄平城東南。壬午、淵衆潰、與其子脩將數百騎突圍東南走、大兵急擊之、當流星所墜處、斬淵父子。城破、斬相國以下首級以千數、傳淵首洛陽、遼東、帶方、樂浪、玄菟悉平。

とあるが、宣帝紀と公孫淵傳を比較すると、宣帝紀の方が内容は詳しいが、流れ星に関する記述や城から突撃して出てきた公孫淵父子を斬った件、公孫淵の配下を斬った件について内容は類似しているが字句としては異なる面が多く、流れ星や公孫淵父子が城から出てきた時の方向が相違している。また、京観の話は明帝紀や公孫淵傳にはなく、逆に公孫淵の首を洛陽に運ばせた件は宣帝紀にない。

また、公孫淵からの降伏の申し込みと司馬懿の拒絶⁴⁶⁾についても、史書では宣帝紀にしかなく、これについてはひとまず受け入れておくこととする。

さらに、高句麗傳には

景初二年、太尉司馬宣王率衆討公孫淵、官遣主簿大加將數千人助軍。

とあり、高句麗王・位宮が主簿・大加に数千人を率いさせて派遣したとあり、

『晉書』慕容廆傳には

曾祖莫護跋，魏初率其諸部入居遼西，從宣帝伐公孫氏有功，拜率義王，始建國於棘城之北。

とあり、慕容廆の曾祖父の莫護跋が司馬懿の公孫氏征伐に参加していたとされ、この遼東遠征は曹魏の東北方面の情勢の変化にも少なからず影響を与えている。

なお、この年の6月に司馬懿が遼東に到着し、8月には決着を見ているということは休息日を考慮せずとも「攻百日」を達成しており、かなり早く戦いを終わらせていることになる。

その後、宣帝紀では、

初，文懿篡其叔父恭位而囚之。及將反，將軍綸直、賈範等苦諫，文懿皆殺之。帝乃釋恭之囚，封直等之墓，顯其遺嗣。令曰：「古之伐國，誅其鯨鯢而已，諸爲文懿所誑誤者，皆原之。中國人欲還舊鄉，恣聽之。」

時有兵士寒凍，乞襦，帝弗之與。或曰：「幸多故襦，可以賜之。」帝曰：「襦者官物，人臣無私施也。」乃奏軍人年六十已上者罷遣千餘人，將吏從軍

死亡者致喪還家。遂班師。天子遣使者勞軍于薊，增封食昆陽，并前二縣。

とあり、公孫淵が公孫恭から位を奪った際に公孫恭をとらえ、魏に反旗を翻した際に諫言した者を殺害していたが、司馬懿が諫言した者の後継者を顕彰し、旧郷に帰りたいものを許したとされること、寒さに凍える兵が襦を乞うが司馬懿は与えず、「幸いにも古い襦は多くあるので、賜うことができる」と言われたが、司馬懿は「襦は官物であり、人臣に私施はない」として与えなかったこと、60歳以上の軍人の軍役解除を上奏し千余人が免除されたことや明帝が薊に使者を派遣してきて労い、封地として昆陽を賜ったことが記されている。しかし、綸直・賈範をはじめ、これらの内容は少なくとも史書では『晉書』のみに記されており、史料批判に限界があるため、ひとまずこの通り受け止めておくこととする。

ここで司馬懿は「人臣に私施はない」と述べ、「杓子定規ともとれるほど厳

格に公私を区別する」⁴⁷⁾が、これをその通り受け取ると、「とにかく明帝から疑われるようなことはしない」という意志の表れとも見ることができるだろう。

4：司馬懿の遼東遠征と倭の遣使について

司馬懿の遼東遠征に関連して、倭人傳には

景初二年六月，倭女王遣大夫難升米等詣郡，求詣天子朝獻，太守劉夏遣吏將送詣京都。

とあり、これについては「二年」ではなく「三年」であるとする説を含め、数多くの先行研究があるが、本論攷ではこの遣使に関する『三國志』と『晉書』の記述の比較に絞って考えてみたい。

渡邊義浩は宣帝紀に

正始元年春正月，東倭重譯納貢，焉耆、危須諸國，弱水以南，鮮卑名王，皆遣使來獻。天子歸美宰輔，又增帝封邑。

とあることから、『晉書』では司馬懿こそが卑弥呼の朝貢をもたらした者だと記されているとし、『晉書』倭人傳にも

宣帝之平公孫氏也，其女王遣使至帶方朝見，其後貢聘不絕。

とあることから、司馬懿が公孫氏を平定したことにより卑弥呼が使者を派遣してきたとし、西晉で執筆された『三國志』も同様の認識であったという前提で考えられている⁴⁸⁾。

しかし、宣帝紀の記述を見ると、倭のみならず、焉耆・危須諸国や、弱水以南の鮮卑名王の遣使も含めて司馬懿の功績とされているように見受けられ、倭の朝貢のみが功績とされているわけではない。

加えて、陳壽『三國志』は先行史書の「切り貼り」で編集された傾向が強く、『晉書』と完全に同じ認識で記されていたかどうかは疑問である。葭森健介は卑弥呼の朝貢が司馬懿による政権交代のための準備が進む時期に当たることから、曹魏の皇帝権威を高める必要があったとし、陳壽『三國志』をはじめ、倭国からの遣使の記録が正史に残されている時期は皇帝権威の誇示が必要だと考えられた時期だとしているが⁴⁹⁾、筆者は卑弥呼の朝貢の時期に司馬懿に

よる政権交代の準備が進められていたと認識してはいない⁵⁰⁾ものの、蜀漢・孫呉の動向や先述の洛陽の「宮室修治」を踏まえても、皇帝権威を示す必要性があったとする見解は首肯できると考えている。加えて、『三國志』魏書の主たる典拠が王沈『魏書』や『魏略』である⁵¹⁾ことから、それらを「切り貼り」して編纂された『三國志』魏書においては魏の皇帝権威の向上への記述が残存していても不思議ではない。また、皇帝権威が高まれば、その下で遼東遠征に活躍した司馬懿の業績としても評価が高まったであろう。

おわりに

青龍3年から景初年間の遼東遠征終結にかけての宣帝紀における司馬懿に関する記述を陳壽『三國志』及び裴注と比較検討してみると、宣帝紀の記述にはあって他の史書には記載がない場合や逆に『三國志』及び裴注所引史籍にあるが宣帝紀にない場合があるため、特に宣帝紀の史料批判が難しいことが多いが、『三國志』本文や臧榮緒『晉書』、干寶『晉紀』、『漢晉春秋』が典拠の一つである、もしくはそれらの史書と同じ典拠を参照したと思われる箇所も存在する。また、宣帝紀には王朝の初代皇帝の扱いを受ける司馬懿の権威を高めるためと思われる逸話や表現も存在するので、注意が必要である。

さらに、諸葛亮没後の白鹿献上と所謂「曹真殘碑」建立、洛陽の「宮室修治」の経緯を確認すると、司馬懿とその一族がやはり勢力拡大のためというよりは生き残りのために青龍年間から景初年間でも述べるべきことは最小限にしても述べつつ、明帝本人に神経質なほどに気を使い、曹魏宗室や名族との関係を深めていることがわかる。

また、明帝に警戒され、大將軍から太尉となったにもかかわらず長安で蜀漢への対応を続けていた司馬懿の遼東遠征での勝利は曹魏の勢力拡大と権威の向上に貢献したが、その前の母丘儉の遼東遠征失敗と彼を指名した明帝の「失敗」を救うものでもあり、結果的に名誉職に移行しつつある司馬懿の政治的・軍事的権威の相対的上昇につながるものであったと思われる。

今後は、司馬懿が明帝崩御から曹爽との輔政の詳細について検討し、所謂「高平陵政変」への過程を考察していきたいと考えている。

注

- 1) 唐修『晉書』での唐高祖・李淵の避諱。
- 2) 津田資久「『曹真残碑』考釈」（『国史館東洋史学』1、2006年、59-96頁）69-74頁、同「符瑞「張掖郡玄石図」の出現と司馬懿の政治的立場」（『九州大学東洋史論集』35、33-68頁、2007年）47-55頁。關尾史郎『三国志拾遺 正——史料・地域・対外関係』（Nakazato Labo、2021年）「第5章「曹真残碑」の世界——張遼と諸葛亮」（141-179頁）、同「補論2 曹真的官歴について」（181-186頁）も参照。
- 3) 註1 津田2007年論文53頁。
- 4) 註1 津田2007年論文51頁。
- 5) 渡邊義浩「王肅の祭天思想」（『中国文化』66、2008年、1-15頁、のち『西晉「儒教國家」と貴族制』（汲古書院、2010年）410-411頁）。
- 6) 註5 渡邊論文13-14頁注(14)、422-423頁〔(一六)〕。
- 7) 註5 渡邊論文6頁〔411頁〕。
- 8) 拙稿「曹魏・太和2年-6年の司馬懿像に関する史料批判的研究—『晉書』卷一宣帝紀と『三國志』及び裴松之注を中心として—」（『東洋哲学研究所紀要』36、2021年、65-84頁）76-79頁では、（拙稿では述べていない司馬昭と王肅の娘との婚姻も含め、）司馬懿とその一族が勢力拡大のためというよりは一族生き残りのために婚姻を通して太和年間から青龍年間でも曹魏宗室や名族との関係との関係を深めたと述べている。
- 9) 注1 津田2006年論文73頁では、曹真の後任にあたる司馬懿が雍州の大姓とともに曹真を宣揚し、その碑文に「虞舜始祖曹氏系譜」も盛り込むことで司馬懿自身も特別な地位にあり、明帝との緊密な関係も強調した上で、雍州社会と司馬懿の紐帯も確認したとされる。
- 10) 高堂隆傳の上疏の中で、彼が述べる「鷹揚之臣」は司馬懿のことだと筆者も考えているが、それはあくまでも明帝や高堂隆の見解であって、司馬懿自身がどのように考え、対応していたかということとは別の問題であると思われる。
- 11) 安田二郎「曹魏明帝の「宮室修治」をめぐる」（『東方學』111、2006年、1-21頁）15-18頁ではこの「宮室修治」が未整備状態であった新帝都・洛陽の新たな宮城構成による整備の一環であったことや、その工事自体が一種の超大型公共事業であったことを指摘し、陳壽『三國志』において魏が天命を失って西晋に禪譲される結果を招いた君主としての役割を明帝に担わせる「曲筆」があったとし、佐川英治「「奢靡」と「狂直」—洛陽建設をめぐる魏の明帝と高堂隆—」（『中国文史論叢』6、2010年、1-34頁、のち佐川英治〔著〕『中国古代都城の設計

と思想 円丘祭祀の歴史的展開」（勉誠出版、2016年）71-106頁所収）では明帝と高堂隆の対立が単なる「奢靡」への諫言によるものだけではなく、都城プランの相違によるものであると指摘している。

- 12) 朱子彦『司馬懿傳』（人民出版社、2020年）第10章・開府治事与特任太尉の「四、寵辱不惊、智諫明帝」359頁。佐藤達郎「曹魏文・明帝期の政界と名族層の動向—陳羣・司馬懿を中心に—」（『東洋史研究』52-1、1993年）も参照。
- 13) 『宋書』卷十四禮志一。
- 14) 注5渡邊論文8頁〔415頁〕。
- 15) 公孫氏政権については数多くの研究があるが、ここでは大庭脩『親魏倭王』（学生社、1971年、59-87頁、のち『親魏倭王』増補版、学生社、2001年）、西嶋定生「親魏倭王冊封に至る東アジアの情勢 公孫氏政権の興亡を中心として」（井上光貞博士還暦記念会〔編〕『古代史論叢』上巻、吉川弘文館、1978年、1-48頁、のち『西嶋定生東アジア史論集』3 東アジア世界と冊封体制、岩波書店、2002年、183-226頁所収）、佐藤佑治「公孫氏政権と司馬懿の遼東遠征」（『関東学院大学文学部紀要』105、2005年）、仁藤敦史「卑弥呼の王権と朝貢—公孫氏政権と魏王朝—」（『国立歴史民俗博物館研究報告』151、343-355頁、2009年、のち『古代王権と東アジア』（吉川弘文館、2024年）20-71頁所収）、三崎良章「遼東公孫氏政権と非漢民族」（『教育と研究 早稲田大学本庄高等学院研究紀要』28 75-85頁、2010年）、李智裕「曹魏征討遼東公孫氏政権始末」（『遼寧省博物館館刊』2018年）を挙げておくこととする。
- 16) 明帝紀。
- 17) 呉主傳。
- 18) 呉主傳。
- 19) 蔣濟傳裴注所引司馬彪『戰略』、公孫淵傳裴注所引『呉書』。
- 20) 呉主傳。
- 21) 公孫淵傳。
- 22) 張昭傳。
- 23) 公孫淵傳本文及び同傳裴注所引『魏略』。
- 24) 呉主傳裴注所引『呉書』。
- 25) 明帝紀。ここまでの孫呉の遼東への動きについては、注15西嶋前掲論文189-95頁、注15仁藤前掲論文に加えて、渡邊義浩「孫呉の国際秩序と亶州」（『三國志研究』8、2013年、37-48頁、のち『三國志より見た邪馬臺國—国際関係と文化を中心として—』（汲古書院、2016年）131-150頁所収）参照。
- 26) 明帝紀、公孫淵傳、毋丘儉傳。また、本論攷では、田中俊明「魏の東方経略をめぐる問題点」（『古代武器研究』9、2008年、6-15頁）の成果を踏まえて「毋丘儉」ではなく「毋丘儉」とする。
- 27) 注15西嶋前掲論文19-20頁〔198-199頁〕。

- 28) 武帝紀。
- 29) 蘇則傳、母丘儉傳。
- 30) 母丘儉傳。なお、注8拙稿76-79頁などからも、彼は「浮華」とは認識されていないと思われる。
- 31) 注12朱子彦前掲書372 - 373頁も参照。
- 32) 註8拙稿77頁。
- 33) 母丘儉傳。
- 34) 陳陽「母丘儉と曹魏中后期政治問題考辨」(『湖北文理学院学報』43-1、2022年、5-10頁) 6-7頁。
- 35) 『晉書』何曾傳では、何曾が司馬懿の遼東遠征に監軍か副将をつけるよう進言したが、明帝は従わなかったとされる。その理由として、朱子彦前掲書376-377頁では、この一文を通して、明帝が自身の非凡な政治の才に自信を有していて司馬懿を制御できると考えていたことと、司馬懿の戦略と準備から必勝の確信があり、彼への信任を表明するため、監軍や副将を置かずに掣肘しようとしたこと、さらに曹操以来の質任制度があったことを挙げている。
- 36) 母丘儉傳裴注。
- 37) 母丘儉の高句麗討伐も含め、高句麗と曹魏や公孫氏政権との関係については数多くの研究があるが、ここでは田中俊明「『魏志』東夷伝訳註初稿」(1)(『国立歴史民俗博物館研究報告』151、357-438頁、2009年)、余昊奎〔著〕井上直樹〔訳〕「三世紀前半の東アジアの国際情勢と高句麗の対外政策」(『朝鮮学報』227、2013年、1-45頁)、侯苗・崔向東「論公孫氏政権と高句麗の関係演変及影響」(『大連大学学報』42-6、2021年)、関尾史郎『周縁の三国志』(東方書店、2023年)第二章 鮮卑と高句麗・二 高句麗、92-129頁を挙げておくこととする。
- 38) 後主傳や蔣琬傳にあるように、この年(蜀漢の延熙元年)に蔣琬は詔を受けて漢中に赴き、開府して北伐の準備に入っている。
- 39) 注12朱子彦前掲書380-381頁も参照。
- 40) 注15李智裕前掲論文345頁。
- 41) 『水経注』卷十四大遼水では
又南逕遼隊縣故城西，王莽更名之曰順睦也。公孫淵遣將軍畢衍拒司馬懿于遼隊，即是處也。
とあり、遼隊を「遼隊」としているが、砥石山の南を通った先に遼隧(遼隊)県城があったとされる。
- 42) 注15仁藤前掲論文350頁〔34頁〕、朱子彦前掲書387頁。
- 43) 注15李智裕前掲論文344-345頁。
- 44) 注15仁藤前掲論文351頁〔34頁〕。
- 45) 福原啓郎『西晉の武帝 司馬炎』(白帝社、1995年)第二章 司馬懿・58-59頁なども参照。

- 46) これらのやり取りについては、注45福原前掲書（白帝社、1995年）59頁なども参照。
- 47) 注45福原前掲書60頁。
- 48) 渡邊義浩「『三国志』東夷伝倭人の条に現れた世界観と国際関係」（『三国志研究』8、2013年、37-48頁、のち『三国志より見た邪馬臺國—国際関係と文化を中心として—』（汲古書院、2016年）第六章 国際関係よりみた倭人傳、131-150頁所収）。
- 49) 葭森健介「『三国志』東夷伝の世界観—陳寿の執筆方針を探る—」（『資料学の方法を探る』20 2021年、25-48頁）44頁。關尾史郎『三国志拾遺 続——文献と文物の間』（Nakazato Labo、2021年）「附録三 葭森健介「『三国志』東夷伝の世界観」について」（251-256頁）も参照。
- 50) 注12朱子彦前掲書426-421頁では、司馬懿の明帝崩御後の太傅就任は曹爽による「奪権」ではないとしており、少なくとも正始年間初期は曹爽と司馬懿は反目していないことにも留意する必要があるだろう。
- 51) 拙稿「王沈『魏書』研究」（『創価大学大学院紀要』20、1999年、263-278頁）、拙著『三国志 正史と小説の狭間』（白帝社、2006年初版・2009年第2版、2017年電子書籍版〔パンダ・パブリッシング株式会社〕）第1章・正史『三国志』と小説『三国志演義』8-33頁。

